

1日目 平成28年12月27日(火)

受付 10:00~10:30

開会式 10:30~10:45

挨拶

浦部利明先生(全放連・コンテスト委員長 東京都立穂ヶ丘高等学校長)

- ・夏のNHK放送コンテスト、総文祭に参加生徒の技量(技術)や感性などは、本番で我々顧問、審査員の想像を超えるものが見受けられた。技量や技術は必要なものなので、得られた力は今後活かして欲しい。
- ・生徒を活躍させる黒子が顧問(先生)なので、顧問も技量をつけて欲しい。

安田徹先生(全放連・コンテスト運営委員長 駒場学園高等学校)

- ・本日参加の顧問は、指導力・審査能力の両面を向上させる必要がある。
- ・生徒の力をバックアップするのが顧問
- ・若手の顧問はベテラン顧問の技術を身に付け、ベテラン顧問は次の世代の顧問に技術を伝えて欲しい。

講座1「顧問交流(アナウンス・朗読指導)」 10:45~11:45

*この講座では、地域・年齢等により11班に分かれて日々の活動状況(部員の勧誘、予算、指導の仕方等の意見交換・情報交換、コンテストの疑問などをお互い話し合う講座でした。大会2日目の閉会式に、各班から提出された資料を講座4の資料と共にCD-ROMの形にして全員に配付されました

6班(報告者の所属している班)

- ・活動日・・・週1~2回程度
- ・発声練習をしている
- ・年度によって活動日が異なる
- ・各学年間の引継ぎ、顧問間の引継ぎをさせている
- ・学年ごとに参加するコンテストの分野を変えている(アナウンス、朗読、番組など)
- ・OBやOGが卒業後も聴きに來てくれている
- ・発声練習は毎日させたい
- ・発声練習は一斉・各自・内容などで形を変えながら行っている
- ・他校で教えてもらったことを自校でアレンジして行っている
- ・朝の校内放送実施・・・新聞を読む習慣が身に付く、決まった時間内に完結する練習もする
- ・曜日によって内容を変えて放送する
- ・原稿は放送前日にチェックしている
- ・地域によっては放送音が近隣の苦情につながったりする場合もある
- ・放送関係専門の外部講師を顧問としている学校もある

昼食 11:45~12:30(45分)

講座2 「アナウンス・朗読模擬審査講習」 12:30~15:50

講師 金野正人先生(NHK放送研修センター・日本語センターエグゼティブ・アナウンサー)

I 「読む基本」とは? [解説・講義]

- ・実際行われている審査は難しい・・・聞き直しができず、すぐに点数をつけなければならない
- ・「読む力」をつけさせるには・・・
 - 1 読むこと=コミュニケーション力 聞く側にどのように伝えるか
 - 2 読む練習を繰り返す、相手に伝える意識を強くもつ
 - 3 話すように読む・・・聞いている人が「読み」でなく、「話している」ように聞こえるか
 - 4 話をするとき・・・分かってもらえるように話す(強弱、繰り返し、息の使い方など)
 - 5 息・・・不自然ではない息づかい、腹式呼吸(キーワードは「立てる」)
 - 6 「話し」て聞かせる・・・「読む」のではない
 - 7 伝える動機・発信力は、書かれたことを伝える意識をもつことにある
 - 8 作者が「何を伝えようとしているのか」を意識して読む(「意味」を考えると伝わる)

- 9 ニュース原稿の読み方は、息を抜きながら読むくらいがよい
- 10 舌の動きを意識する・・・あ行とは行／「い」と「ひ」は近い音
- 11 プロミネンス・・・ことばの意味を際立たせる
- 12 イントネーション・・・意味のまとまりを、音の高低で組み立てる
- 13 「間」を考える
- 14 相手を意識し、「音」で聞いた時に誤解されないように伝える

Ⅱ 模擬審査 [テキスト 過去の大会本選での録音音源、講評時に紙媒体の原稿配付]

- ・「アナウンス」「朗読」とも3例を放送し、自己採点、集計後「自分の点」「会場（講座2の参加者）の平均点」「最高点・最低点」「金野先生の点数」「コンテスト点（本選時の平均点）」を発表し、後に講師のコメント

「アナウンス」 講評

- ・「間」の取り方、「イントネーション」「うねり」の具体的な指摘
- ・内容（意味）が取りやすくなる工夫を・・・文の前後の入れ替え
- ・「冒頭部分（読み始め）」の工夫・・・後の内容との関係、繋がりを考えて文章を組み立てる
- ・内容に応じてセンテンスに「間」をもたせる
- ・全体の構成を分かりやすく伝えられるよう、「原稿」を書き、「読み」の練習をする

「朗読」の講評

- ・準決勝のレベルが高い
- ・3例のそれぞれの特徴「会話文からの入り」「内容が殆ど手紙文」「地の文入り」
- ・地の文が長いと点がつけにくい→原稿とする箇所の選び方は、重要な意味が含まれたものを
- ・語尾について→登場人物の「癖」という捉え方もあるが、伸びない方がよい
- ・感情的な台詞は大げさになりすぎないように
- ・手紙文が長すぎると、どこからどこまでかがわかりにくくなってしまう
- ・会話文は芝居読みをせず、その場面でのニュアンスを出すように読む
- ・地の文・会話文の心情を読み分ける
- ・前後の内容に応じて雰囲気をつくり、「間」も有効につかいながら「聞いている人」にみえるように伝える

講座3 「実践発表：放送部の活動と指導法～経験のない顧問の指導法」 16:05～17:00

講師 横山秀先生（静岡県浜松市立高等学校）

- ・部活動の在り方として→一部の組織をしっかりとさせ、時間を守る、整理整頓（乱れていると、全ての活動に影響し、だらしくなる）
- ・「原稿」や活動の流れには「起承転結」の構成（バランス）をつくる
- ・具体的な活動例
 - 1 発声練習（「外郎売り」など）は、ペアをつくり読む
 - 2 上級生が下級生を指導する体制をつくる
 - 3 「アクセント辞典」をこまめに引く
 - 4 発表している様子を録画し、自分で振り返る
 - 5 予定・計画を早めに示し、すすめていく
 - 6 制作の途中に「遊び」を入れる
 - 7 著作権に関しては慎重、かつ正確に手続きする
 - 8 発表している自分の姿を録画して客観的に反省をする
 - 9 手本となるテキスト、資料を通して技術や内面的な部分での向上を図る

終了

2日目 平成28年12月28日(水)
受付 9:00~9:30

講座4 「顧問交流(番組指導)」 9:30~10:30

*この講座では、アナウンス・朗読以外の番組制作分野について、講座1の班と同じメンバーで意見交換をしました。以下、報告者のいた班で発表された主な意見を紹介します。

- ・地域にあるFM局などのコミュニティサイトに積極的に参加する
- ・機材操作が苦手な人は、詳しい人に訊いてできるようにするとよい
- ・現状は機材操作が得意な人に任せているが、それではいけない
- ・インタビューする場面で質問ができない、内容が分かりにくいシーンが少なからずある
- ・ドキュメントをつくらない、つくれない人もいるのが現状
- ・在籍している部員で苦勞している場合は、OBやOGに手伝ってもらう方法もある
- ・「総合学習」の時間で、アイパットで作品をつくる生徒もいるカリキュラムもあるので、積極的に制作に臨む姿勢を持ってもらいたい
- ・カメラの大きさなどで、取材される側はかまえる姿勢(心かまえ)が違ってくる
- ・著作権の扱い・手続きに関する知識がないと、制作する際に支障をきたすので、周知しておく必要がある
- ・私学によっては、学校行事を撮影してDVDにして販売しているところもある
- ・ガンマイク、ピンマイク、バンダイマイク等を、場面や状況に応じて使いわける

昼食 12:00~13:00

講座5 「番組技術と模擬審査～はじめての作品作りと許諾・権利処理～」 10:40~12:00

講師 島 耕一(神戸国際大学附属高等学校)

- ・導入 新入部員をどう増やすか→校内放送を活用する・・・4月がチャンス
- ・昼の放送・・・音楽のみでなく、DJ、曲にまつわるエピソードなど加えるなど工夫をする
- ・イントロで話(導入としての紹介)をして聞き手を引き込む
- ・なかなか流れをつくれなときは、「遊び」の要素を入れる
- ・曲→曲の紹介(曲に関わるエピソード)→お知らせ→次の曲→・・・の流れをつくる
- ・放送中にプロのアナウンサーの動作や用語、振りを真似て取り入れると馴染む切掛けになる
- ・月曜日に1週間の予定を組んだり、曜日で担当や内容を設定することで、責任をもたせる
- ・活動中の雰囲気、手抜きをする者がいれば、その場で直させる
- ・「環境」を整えておくと活動しやすくなる(整理整頓を顧問、生徒と一緒に、予定を書き込んだカレンダーを用意し、いつまでに仕上げるか、締切日を記入しておく)
- ・「アナウンス」「朗読」のみでなく、「番組制作」へも活動の幅を広げるとよい
- ・「赤本4」の要項を拡大コピーして壁に貼っておく→各自の意識を高める
- ・インタビューした時の感想をナレーションにつなげる(活かす)
- ・インタビュー内容を項目ごとに並べて、分類分けし、話し合いながら仕上げていく
- ・オープニングとエンディングを先に決めてしまう、という方法もある
- ・「感性」を磨く練習を取り入れる
- ・インタビュー取材は1回で済むようにする・・・顧問がアドバイスをしながら仕上げる
- ・「ネタおこし」→アナウンス原稿から番組もつくれる(題材を多角的に活用する)

講座6 「番組技術と模擬審査」 13:00~15:50

講師 中根健先生(NHK制作局 青少年・教育番組部 チーフ・プロディューサー)

*この講座では、「番組制作」3作品を受講者が審査、更に中根先生も審査し、審査のポイントを解説する、という内容。

I 中根先生の解説

- ・審査する際大切な視点は、「高校生の立場」から発信しているか、という点にある
- ・制作意図として、「何を伝えたいのか」が観ている者に分からないと作品が生きてこない
- ・あれこれ沢山要素を詰め過ぎず、ポイントを絞る
- ・全体として「印象」に残る雰囲気づくりも、作品としては重要
- ・挑戦する点も評価の対象となりうる
- ・「分かりやすさ」と「メッセージ性」「芸術性」のバランスも作品には必要となる
- ・日頃からこまめにメモをとり、作品のオチ、構成に活かす
- ・プラス評価（加点）でみて、できるだけ伸ばす方向で審査をする姿勢をもとう

Ⅱ 「Rの法則」を題材として、番組制作について考察する

*過去に放送された企画ものを観ながら、製作者側の意図、作品に対する思いを考えるコーナーでし た。

- ・「Rの法則」は、「笑い」あり、「新たな発見」ありなど、バラエティーに富んだ内容で構成されている
- ・番組制作意図としては「親子視聴」を目指す、10代がみてほしい、知ってほしい企画をコンセプトとしている
- ・現役のタレント総勢76人が出演し、既に8期生に至っている
[具体的な作品例 「戦争について考えるー竹内浩三ー」]
- ・冒頭部で浩三の20代の詩を紹介「なんのために生きるか ともかく生きている ともかく」「つつい悪いことをしてしまう するとたまらない たまらない」「死ぬるまで、ひたぶる たたかってきます」
- 10代の詩は、ユーモアあふれ、ユニークな内容、表現された作品が多いが、自分が戦争に出征し、戦場に赴くようになると、作風が変わっていく。そのテーマは「戦場で戦う意味」「人を殺すためらい」などになる。
- ・制作意図としては、戦後70年が経ち、「戦争を知らない若者がどうしたら戦争をより身近に感じられるのか」／あと半年しか時間がないとしたら、何がしたいかーなどである
- ・浩三が「軍隊へ入ってどう気持ちが変わったのか」をイラストや詩の朗読で紹介する構成
- ・視聴者が「もし自分だったら・・・」と、浩三の気持ちに寄り添えるような流れをつくっている
- ・制作者本人（中根先生）の自己評価は100点満点で75点→マイナス評価として「詩の朗読が長い」「展開が単調」などがあげられる。視聴率は通常1%がこの回は0.7%だった。同じ30分でも時間の感覚が異なることも。

閉会式 挨拶 中尾龍平（東海大学付属浦安高等学校） 15:50～16:00

- ・赤本は3月に内容が発表されるので、早めに目を通しておこう／「音源」に関する手続きについて

*閉会式終了後に修了証授与（「修了証」と「審査員証」「講座1・4データ」）が配付されました

【 受講修了の所見 】

今回の受講は「顧問交流」が分野別に2回行われたので、より充実した情報交換ができ、よい機会となりました。各講座についても、

実際審査をする際、どのような点にポイントをおいて評価すればよいのかの視点でお話いただけてよかったです。今後の活動に活かしていきたいと思いました。

審査するとき、審査員により個人差が生じる場合がありますが、その審査員なりの基準を設定し、それがぶれなければある程度の評価ができるのだ、という信念をもつことが大切だと思いました。